

中村幸彦著述集

第六卷

©一九八二

中村幸彦著述集 第六卷

定価六八〇〇円

昭和五十七年九月一日印刷

昭和五十七年九月十日発行

著者 中村 幸彦

発行者 高 梨 茂

印刷者 青 木 勇

発行者 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三三四
検印廃止

中村幸彦著述集

第六卷

近世作家作品論

目次

一	林羅山の翻訳文学——『花女集』『狐媚鈔』を主として——	七
二	好色一代男の文体	三〇
三	万の文反古の諸問題	六
四	西鶴俗つれ／＼の書誌的考察	九
五	多田南嶺の小説	二四
六	宝暦明和の大阪騒壇——『列仙伝』の人びと——	一七
七	諷刺家銅脈先生	二〇
八	上田秋成雑記	二四
	1 青年時の俳諧 (一三四)	
	2 秋成と俳諧 (一三三)	
	3 秋成の文体 (一四四)	
	4 狷介と孤独について (一五四)	
九	秋成に描かれた人々	二六
	1 前書 (二六〇)	
	2 諸道聴耳世間猿 (二六七)	
	3 世間妾形氣 (二六二)	
	4 癩癩談 (二九〇)	
	5 雨月物語 (三〇五)	
	6 春雨物語 (三二二)	

十 絵本太閤記について

三八

十一 桜姫伝と曙草紙

三四

十二 十返舎一九論——付弥次郎兵衛北八論——

三六

十三 為永春水の手法——立作者的立場——

三八

十四 為永春水小論

四〇

後記

四三

書誌

四九

〈挿圖〉

化女集

九

西鶴俗つれ／＼

六

臨漫書艸

二五

狐媚鈔

二

100/111

武内確斎の墓

三三

狐媚遊談

二六

多田南嶺の墓

二五

絵本太閤記

三三

西鶴織留

六

世間母親容気

二五

勸善桜姫伝

三七

万の文反古

六六八四

列仙伝

二六

花名所懐中曆(稿本)

三九

西鶴名残の友

六六八六

にしのみやくさ

二七

春色雛の梅(稿本)

三九五

八二八五

相摸今昔物語

二六

小夜姫物語

四七

丹波太郎物語

八二八三

当世癡人伝

二七

近世作家作品論

一 林羅山の翻訳文学

——『化女集』『狐媚鈔』を主として——

—

主として報告しようとする二書は、先年来の肥前島原松平文庫の調査中に、見るを得たものである。よって、昭和三十五年秋の近世文学会や西日本国語国文学会の席上、同文庫の紹介中にも、雑誌『文学』（第二十九巻十一号、三十巻一号）の同文庫紹介文中にも、大略は述べたのであるが、そこでは松平文庫の広い紹介を目的とした為に、詳細には至り得なかった。改めてここにとり上げる所以である。

『化女集』は大本一冊全二十六丁。内外題ともに「化女集」とある。末に「尚舎源忠房」「文庫」の印があり、同じ印をもつ多くの写本と同じく、寛文から元禄の間の写。筆蹟から見ても、寛文に近い頃の写と思われる。毎半葉十一行の平仮名交り文で、所々に誤写があつて、明らかに転写本である。「化女」とは筆者には珍しい語であるが、女性を教化するの意か。所収は、悉く妻としてその節義の称賛すべき人々、三十五人の伝となっている。筆者は初め早々の間に、その出典を、劉向の『古列女伝』と某氏の『新統列女伝』に求めて、その悉くを得た。

文章の比較も若干の省略したものであるが、中にはそのままのものがあり、殊に『新統列女伝』よりの部分は、その配列も、殆どその書より抄出の順を追っているので、幕初最もよく読まれたこれらの二書によるものと推定した。しかしこの二書と説話の重なる一書に、朝鮮李朝世宗の十三年、僂循によって編まれ、広く流布して、彼の地でも度々図入で刊行された、教訓書『三綱行実図』がある。しかも我が国に早く伝来、林羅山の『梅村載筆』にするす外国書目の中にも『三綱行実』『二倫行実』とあったことに想到した。改めて、以上の二書とも合せて、四者を比較するに、『化女集』の原典は、果然、この『三綱行実図』の烈女篇一冊であった。『化女集』は、この烈女篇全部の当時としては忠実な翻訳であったのである。勿論、配列もそのままである。ただし訳そのものは、忠実といっても、恐らく主な読者と予定した女性をおもんばかって、色々の考慮がはらわれている。若干その考慮にふれば、一に、当時の日本の女性には耳遠い中国、朝鮮の地名や、歴史上の人物など固有名詞が略してある。例えば、『三綱』『趙氏縊典』の一条の初めを、『化女集』の訳に合せてかかけると、

趙氏。貝州人。王則反。聞趙有殊色。使人覘致之。欲納為妻。

趙氏は貝州人なり、みめかたちいつくし、国の乱にあへり、賊これをきゝて妻とせんとす

の如くである。また地名を略して、貴溪山とあるをただ「山」としたり（『李氏縊獄』）、南鄭獄とあるを、「その所のつかさ」（『穆姜撫子』）としたものもある。二には、注釈的な説明や、文脈の通り易いように、文句を補った所がある。「伯姫速火」で、「保伝（とて二人のかしつき）あらされは」の括弧の中が注である。「媛姜解格」で「吏（とて獄をつかさとするもの）これをころす」の括弧中も、それである。文脈を補ったものは所々に多い。三にかなり原文を省略した所もある。「淑英断髮」で、

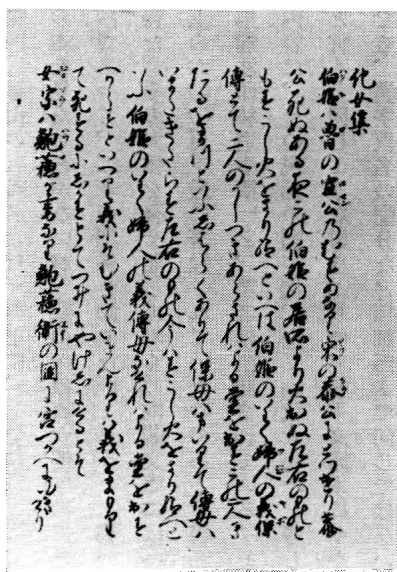
答曰。夫无也。可_レ背乎。願死無_レ他。欲割耳誓。保姆持不_レ許。（夫姻媚。歳時朔望。褻致礼惟謹。居不御薰

沢。読列女伝……

妻こたへてちかいていわく、死するとも他にゆくへからず、耳をきりてそのしるしとせんといふ、保母とゝめてゆるさす、その後列女伝というふみをよみて……

の漢文の括弧の中は、本筋には関係ないし、又訳し難いので省略したものであらう。元来平易な『三綱』の文章なので、かかる省略は乏しく、大体は逐語的に訳してある。四に、今見る島原松平文庫の『化女集』は誤写の多い本なので、正確には何とも言えないが、誤訳かと思われたり、必要な語をおとしたりした所もある。「姪」を「母」としたり、「弟妻蔡氏」とある「弟妻」を略して、人物関係が不明になった所もある（朱氏懽辱）。これらが誤写によるものでないならば、忽々の間の訳業ということになるう。

かかる態度からして、この書は、徳川時代に入つて、この写本の年次頃迄に、多く出現した女訓書の一と見な



化女集

してよい。又一面、同じ頃大陸の説話文学が次々と翻訳を見ていたが、その一つと考えてもよい。いづれにせよ、それは小説史上仮名草子の中に分類される性質のものである。しかし従来の仮名草子研究にも、この『化女集』にふれるものなく、もれて来た。それでも注意すれば、既に彰考館の目録には、この名で登記されているのである。今、彰考館本を調査する暇がないが、同内容と考えて支障なからう。彰考館本との比較は後日に残すとして、なお別に『羅山林先生集』附録

第四、羅山の「編著書目」の中に、「貞女倭字抄二巻」を見出したので、筆者は『文学』誌での紹介で、「私はその本を見たことがないが、羅山には貞女倭字抄二巻の著述があると言う。化女集の内容は、正に一種の貞女倭字抄であって、二者の関係を知らたいと思う」と書いた。それを見られた内閣文庫の福井保氏から早速に御教示を得た。その大体を合せ記しておく。内閣文庫には『貞女和字記』一冊を蔵する。既に『内閣文庫国書分類目録』上の六〇〇頁下段に著録されていたのである。書名は内外題ともに「貞女和字記」とあり、巻頭書名の下に「民部卿法印林道春撰」と、著者は明記されている。そして、福井氏が三十四条の冒頭を一々に示されたのによれば、内容は、その説話の順序迄、全く『化女集』と等しい。しかも平仮名交り十一行、書写年次は、寛永から寛文頃と言う。同じような書きぶりで、松平文庫本にやや先んじた書写のものであった。同時に、示されただけの文章でも、漢字仮名の配分など極細部まで同じではないけれども、『化女集』と全く同じ内容と言ってよい。この書が又「貞女和字記」と題されていることが、福井氏によって明らかにされたことは欣快としなければならない。

しかし『和字記』即『倭字抄』との判断を下すには、「編著書目」の二巻と、現存の一冊との相違、いかなる理由で三つの書名を持つかなど問題は残る。殊に『貞女和字記』は、印記によれば後年に林述斎が入手したもので、もともと林家にあったものでないかもわからないのが若干気にかかる。それにしても、それは原本にあったかいは不明ながら『化女集』にはない、早く寛永から寛文の間に、「民部卿法印」云々と著者名を附して写されているし、松平忠房は、林家と親しく、林家の著述を数々と写している所からして、これも羅山の著述、即ち「貞女倭字抄」と別に称されたものの、又はその一部と認めてよいのではなからうか。

『化女集』が「貞女倭字抄」又はその一部に該当するとの推定があたりとすれば、林羅山と言う幕初啓蒙期の大先輩が、中江藤樹や辻原元甫や『倭小学』を著した山崎闇斎などの、後輩儒者に先んじて、かかる啓蒙的翻訳

説話集を編んだことは、一応注目に値する。

二

『狐媚鈔』は大本一冊全五十丁。外題は「狐媚鈔」、内題は「狐媚倭字抄」。末に又「尚舍源忠房」「文庫」の二印があって、寛文元禄間の写で、転写本と見なすべきである。每半葉十一行片仮名交り。所収説話三十五話、書名の如く、悉く狐の怪に關している。その一話「王知古」の末に「唐小説ニアリ又狐媚叢談ニアリ」と、全巻中ただ一つの注記を認める。唐小説とは何をさすか。この「王知古」と同内容が、『太平広記』巻四百五十五に「張直方」と題して収まり、「出三水小牘」と注記する。『三水小牘』は、これを収める『説郛』では宋の皇甫枚著とするが、『古今説海』などでは皇甫枚を唐人とする。この唐小説とは、『三水小牘』あたりをさすと見て、一応

狐媚倭字抄
孫岩
後親ノ世ニ孫岩ト云人アリ事ヲノトリテ三章ニ
テ衣服ヲカス常トナシテテラヌ岩コシ怪テ
事ノ怪ル時ヲ伺テ其衣ヲ開テ見ハ尾ノ長サ
三尺バカリアリテ狐ノ尾ニ似タリ岩驚キテオソレ
テコレヲ追出ス其去トスル時カヲ以テ岩ハ髪ヲ
カリテ走ル人々コレヲ追フ其敗化ノ狐トナリテ去ル
遂ニオソワカス其後ニ京中ニ髪ヲシテモソノ百
三十人バカリアリ是ハ狐バケテ人トナリヨキ衣家
シキテ身シヨフホニ道路ニアリク見ルモノ也付

狐 媚 鈔

説明がつくが、『狐媚叢談』は、私には珍しい書であ
って、漸く『内閣文庫漢籍分類目録』の中に次の如く
見出した。

狐媚叢談 五卷説狐一卷 明万曆刊(草玄居) 二

冊

同 (明草玄居刊本)(林羅山手校本) 五卷説

狐一卷 江戸初写 二冊

そして、これも福井保氏にお願ひして、写真を見るこ
とを得た。『叢談』の大略は『目録』記載の如くで、

所収百三十三条皆狐の話である。ただし『太平広記』卷四百四十七から卷四百五十五にいたる間に所収のものと、同内容のものが多し。『狐媚鈔』と比較すれば『鈔』の悉くの条を、『叢談』の中に発見出来た。「狐媚鈔」とは、一に『狐媚叢談』の翻訳の意の命名だったのである。『叢談』の条との比較を次にかかげ、『太平広記』（人民文学出版社刊本による）所収のものをも合せて比較して見る。

狐媚鈔

狐媚叢談

太平広記

孫 岩

狐截孫巖髮（一）

孫 巖（洛陽伽藍記）

胡道洽

胡道洽死不見屍（一）

胡道洽（異苑）

宋大賢

宋大賢殺狐（一）

宋大賢（法苑珠林）

張 簡

野狐戲張簡（一）

張 簡（朝野僉載）

弥勒仏

狐化為弥勒仏（一）

僧服礼（広異記）

上官翼

上官翼毒狐（一）

上官翼（広異記）

王義方

王義方使野狐（一）

王義方（朝野僉載）

何讓之

何讓之得狐硃字文書（一）

何讓之（乾臞子）

楊伯成

道士収狐（一）

楊伯成（広異記）

劉 甲

狐竊美婦（一）

劉 甲（広異記）

鄭宏之

狐与黄檗為妖（二）

鄭宏之（紀聞）

羅公遠

羅公遠縛狐（二）

汧陽令（広異記）

李 氏

小狐破大狐婚（二）

李 氏（広異記）

韋明府	焚鵲巢斷狐(二)	章明府(広異記)
謝混之	狐向台告巢令(二)	謝混之(広異記)
王苞	葉静能治狐(二)	王苞(広異記)
徐安	徐安妻騎故籠而飛(二)	徐安(集異記)
長孫甲	狐剛子(二)	長孫甲(広異記)
索愛	狐吐媚珠(二)	劉衆愛(広異記)
王黯	王黯為狐壻(二)	王黯(広異記)
袁嘉祚	垣巢老狐(二)	袁嘉祚(紀聞)
党超元	狐仙(三)	
許真	狐生九子(四)	計真(宣室志)
薛夔	狐跨獵犬奔走(四)	薛夔(集異記)
李令緒	牝狐為李令緒阿姑(三)	李令緒(騰聽異志錄)
王生	狐戲王生(三)	王生(靈怪錄)
尹瑗	狐醉被殺(四)	尹瑗(宣室志)
王知古	王知古贅狐被逐(四)	張直方(三水小牘)
驪山	狐 竜(四)	狐 竜(奇事記)
王賈	王賈殺狐(四)	
衢州	道人飛劍斬狐(四)	

施桂芳 施桂芳養狐（五）

関西朝士 麗山狐（五）

蔣常 大別山狐（五）

小三児 狐能治病（五）

『太平広記』の条と比較したのは、前掲の対比の示す如く、『鈔』には『広記』と同じ見出しのあることを述べたからである。『広記』は既に慶長九年林羅山の記した「漢籍目録」（『羅山林先生集』附録第一）や、同人の『梅村載筆』所収の目録にも登記されて、早く渡来していたことの明らかな書である。『狐媚鈔』の見出しは、この『広記』を参照して定めたかと思われる。しかし、そのままに模したのでなく、『叢談』に従いながら、人名で示す方法を学んだと見るべきである。

弥勒仏 狐化為弥勒仏 僧服礼

羅公遠 羅公遠縛狐 汧陽令

の例など見れば、その間の事情は明らかである。『叢談』の「狐生九子」では、許真とある人物が、『広記』の内容の条では、計真となっている。『鈔』は、許真としたのも、『叢談』を主とした一証である。

翻訳の底本も、従って勿論『叢談』であるが、『広記』をも参照した所がなくはない。『叢談』と『広記』の内容の条は、きわめて僅かな文字の相違があるのであるが、それを比較して、

○「胡道洽」時人以為狐也（『叢談』）

時人咸謂狐也（『広記』）

皆イフ狐ノバケタルナリ（『鈔』）